

# 甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話(078)431-4341

## 総合研究所第3回講演会を開催

総合研究所は、摂津祭と共催で、1985年11月21日午後1時から10号館1階1012号講義室で、「学園創始者・平生鈺三郎の人と思想」と題して公開講演会を開催した。まず三島康雄経営学部教授が「平生鈺三郎と大正デモクラシー」、ついで杉原四郎名誉教授が「平生鈺三郎の経済思想」についてそれぞれ約1時間講演された。この講演は、昭和59年度の当研究所の共同研究「『平生鈺三郎の日記』に関する基礎的研究」の研究成果の一部を発表されたものである。以下に、両先生にまとめていただいた講演要旨を掲載する。

### 「平生鈺三郎と大正デモクラシー」

三島 康雄



平生鈺三郎は慶応2年(1866)に誕生し、大正5年(デモクラシー運動の始まった年)には51歳に達していた。当時ではそろそろ隠居する年である。そして彼は明治前半に青年時代を送った多くの人と同じく、一君万民の親和を期待し、忠君愛国をモットーとし、親子同胞の敬愛を信念としていた。明治時代の終りごろから日蓮の思想に共鳴し、他人と自己の利益の調和を考えて社会の発展をはかる「菩薩行」という宗教的理念を持つようになった。これが企業経営者としての平生の経営理念に大きな影響を与えたように思われる。

明治27年に東京海上保険会社に入社した平生は、業績の低下した同社の再建に敏腕をふるい、39年に

1,000株の功労株を贈られたが、同社は大正9年ごろまでに4割～6割8分の高配当を行ない、平生の生活は急速に安定した。明治33年から大阪・神戸支店長として関西で活躍した平生は、大正5年から始まった大正デモクラシーの論調にかなり強い影響を受けたようで、この年の日記には、吉野作造や河上肇の論文に対する平生の見解がしばしば述べられている。

このようなデモクラシー論議の影響をうけた平生は、まず経済民主主義を唱えはじめ、東京海上火災の利潤分配において、高配当と重役に対する特別功労賞の高すぎることを批判し、社員一同にたいする報酬が過少であると主張した。さらに世界大戦によって多数出現した成金・富豪に批判的となり、戦時利得税、相続税、土地増価税の加重を主張し、民衆の負担する消費税、通行税の撤廃も唱えた。

保険業の経営者としての平生にとって特筆すべきことは、三菱系の東京海上の専務であった彼が、大正7年10月に三井物産の子会社として創立された大正海上火災の専務に兼任として就任したことである。三菱・三井の両財閥の企業の重役を兼任した経営者は平生以外にはない。これは平生の人間性が評価されたからであるが、平生は創設期の東京海上を支援した三井物産の恩義を常に感じ、感謝の念を持っていた。他方、三菱財閥の内部では、岩崎小弥太は三菱合資の社長になると、三菱海上火災を設立して東京海上に敵対し始めた。平生は保険業の専門

家としての強い誇りを持っていたが、三菱財閥の岩崎家に対して特別の忠誠心を持っておらず、このような岩崎家の活動に対して強い反感を持っており、これが大正海上の専務に就任した心理的な条件であった。その背後には、平生がデモクラシー論議の影響をうけて、財閥や富豪に対して強い反感を持っていたからである。

さらに平生は経済民本主義の立場から、灘購買組合（現在の灘生協）の設立に協力した。

第一次世界大戦による物価の騰貴は大衆の消費生活を危機的状況に追いやり、住吉村の那須善治は株式仲買業を止めて公共事業に尽力しようと思い、平生に相談した。平生の人類共存主義、自他共助の菩薩行の影響をうけた那須は、灘購買組合の設立を企図し、階級協調主義にもとづく賀川豊彦の消費組合運動の助けをかりて、大正10年5月26日に有限責任灘購買組合が設立され、平生は理事に就任してその初期の発展に尽力したのである。

平生は住吉村の住人の子供の教育のために、大正8年に甲南中学校、12年に甲南高等学校を設立したが、その教育理念として、大正デモクラシー運動の一環としてまき起った教育改造運動の基本的理念である、個性尊重、人格主義、自由主義を甲南学園の教育理念として採用し、それまでの国家主義教育に代る「新教育」を実施したのである。

このように平生は、経営者、社会改良主義者、教育者として、大正デモクラシーの思想に正面から取組み、その実現のために情熱を注いだのである。

### 「平生鈆三郎の経済思想」

杉原 四郎



平生鈆三郎は単に海上火災保険事業についての専門家であるだけでなく、日本経済全体に関するヴィジョンを持ち、それを社会に公表してきた。種々の

時事問題についての彼の論評を通じて我々は、一定のソシアル・フィロソフィーに支えられた経済思想をくみとることができる。私は彼の経済思想を、自由競争主義、社会改良主義およびナショナリズムの三つからなっているものと考えているが、ここではその三つをそれぞれ不労所得批判、労資関係改良論および貿易・植民論にかかわらせて見ることにしよう。

まず、自由競争主義は、個々人が実力を十分に発揮して自由に競争できることを、またその活動に比例した分配がなされることを主張する。才能と努力によって自己の地位を築き上げた平生がこの主張をとり入れ、明治以後も根強く残っている身分的特権や第一次世界大戦後の「成金」に強い批判をいだいたのは自然であろう。不労所得に重税を課すべしとする平生の主張は大正10、11年頃の日記に記されており、相続税の引上げや投機利得、戦時利得、土地増価益に対する課税が必要なこと、この政策は決して社会主義でなく、私有財産制を維持するものであり、その否定をねらう社会主義から現体制を守るためにも不労所得の存在を許してはならないということが強調されている。

つぎに、平生は労資関係を改革し、資本家と労働者とは対等の立場に立って企業活動に協力すべきであること、さらに労働者の一部は経営に参加し、その貢献に対して利潤の一部が分配されるべきであるとする。また平生は労働者の知的肉体的向上のために、企業内に学校や病院や共済施設を作ることを提唱する。こうした主張を平生は昭和8年に社長となった川崎造船所である程度実行した。この考え方を彼はやはり大正中期にうち出すが、それは一方では企業一家の温情主義を批判するものであり、他方では階級対立を前提する社会主義とも一線を画する改良主義だといってよいであろう。

第3に、平生の自由競争主義は国際的には自由貿易主義となってあらわれる。彼は昭和3年に発足した自由通商協会の主唱者の一人で、当時国際的に高まってきた保護主義的傾向の中で、国土が狭く資源の乏しい日本が生きる道は自由貿易しかないのだから、他国に率先して関税を引下げ輸出補助金をへらすべきだと主張した。ただこの場合決して一挙にすべての関税を撤廃せよとするのではなく、幅のある自由貿易政策であること、その意味でナショナリズムと対立するコスモポリタニズムではなく、むしろ国民的利益のための自由貿易主義である。さらに平生は積極的に海外への移民およびこれに伴う資本輸

出を提唱、とくにブラジルこそ日本国民の雄飛する場所として、二度の実施調査にもとづく具体的な提案をしている。

ところでこうした平生の経済政策は、相続税を中心とする不労所得批判といい、労働者の経営参加を説く労資関係論といい、条件つき自由貿易論や移植民論といい、いづれも J.S. ミルが19世紀の中葉にその『経済学原理』で主張したところであった。平生

はそれらをミルから学んだのではないが、この二人が同種の改良政策をのべているのは、その基礎にある彼等のソシアル・フィロソフィーに共通したものがあからであるからであろう。平生は日本経済の改革に心を致すのみならず、教育の改革や社会奉仕に情熱をかたむけたが、そういう活動に彼をかり立てた人生観や社会観には、ミルのそれと通じ合うところが決して少なくなかったのである。

## 昭和60年度共同研究中間報告

### アメリカの社会と文化：

#### 世紀転換期のアメリカ社会の構造分析

研究チーム 鶴見 潔(経営) 河田 潤一(法)  
森田 三郎(文) 丸田 隆(法)  
井川 真砂(文)

本研究の目的は、世紀転換期のアメリカ合衆国における社会的、経済的および思想的構造を明らかにしようとするにある。

世紀転換期のアメリカは、世界史的には、他のヨーロッパ列強とともに植民地争奪戦に加担する反面、国内的には、社会諸矛盾が深刻化する段階にある。いわば、建国以来の独立宣言の理想が、現実社会の前に大きく動揺する時代でもあった。この時代はまた、「能力」と「好運」(チャンス)さえあれば、誰でも成功者になれるという「アメリカン・ドリーム」の開化する時でもあり、このころ形成された「人の生きざま」や「世界観」や「ライフ・スタイル」は、現代アメリカを十分に規定するものである。

研究グループでは、この転換期を1890年～1930年と設定し、同時代を生きた人物を中心に、その思想や行動を通して、時代的構造をトータルに把握したいと考えている。とりあげられる人物は、『ハックルベリーフィン』の作者である Mark Twain (1835～1910)、同時代の先鋭な批評家として知られる Edwin Godkin (1831～1902)、ルースベネディクトの師であり、アメリカ人類学の父とされる Franz Boas (1858～1942) および人民の弁護士といわれ、のちに米最高裁判事となる Louis Brandies (1856～1941) である。さらに、この時代を特徴づけ、また今日のアメリカの金融経済の基盤となった金融制度の確立とその社会思想史的背景についての考察がつけ加えられる。

個別研究テーマとその担当者は以下の通りである。

「世紀転換期のアメリカ・Mark Twain の場合——アジア・アフリカ講演旅行記」(井川真砂・文)

「世紀転換期におけるマシオン政治批判の視角——E.L.ゴドキンの場合」(河田潤一・法)

「アメリカ世紀転換期——フランツ・ボアズの視点から」(森田三郎・文)

「ソシアル・ダーウィニズムからプラグマティズム法学へ——ルイス・ブランダイスとその時代」(丸田隆・法)

「アメリカ金融制度の特質」(鶴身潔・営)。

今後は、この個別テーマをまとめあげることが課題となるが、次年度より、増田光吉教授(文・家族社会学)を研究員としておむかえすることができたので、十分な検討と研究の深化が期待できるものと思われる。

### 18世紀ヨーロッパの社会と思想

#### 研究チーム

前川貞次郎(文) 小笠原弘親(大市大・法)

黒田 忠史(法) 田中 秀夫(経)

山口 和男(経)

#### ① 研究の概要と特色

18世紀ヨーロッパ、とくにフランス、ドイツおよびイギリスについて、それぞれの社会と、またそこに展開される思想を、それらの個性ならびに相互の連関に注目しながら、19世紀以降の近現代社会の意味を問い直すという観点から研究する。

かつて戦後日本のある時期、「封建制から資本制への移行」なる問題意識の下に18世紀史が活潑に研

## シンボルと元型に関する研究

### 研究チーム

井上忠司 (文) 上村邦子 (文) 岡田康伸 (文)  
衣笠 茂 (文) 高阪 薫 (文) 谷口文章 (文)  
谷本泰三 (文) 寺島樵一 (文) 西田英樹 (文)  
久武哲也 (文) 藤岡喜愛 (文) 堀 直 (文)  
松尾恒子 (文) 森 茂起 (文)  
デビッド・ライクロフト (文)  
上原輝男 (玉川学園) 加藤隆久 (神戸女子大)  
河合隼雄 (京大) 樋口和彦 (同志社大)  
和田邦平 (歴史博物館)

本研究は、「シンボル」をめぐる、文学、哲学、歴史学、地理学、心理学など幅広い分野にわたる研究者が集まり、議論することによって総合的に研究する目的をもって始められました。初年度には、それぞれの研究員が現在までの研究成果を発表しあい、知識を交換し議論するための研究会を定期的に催してきた。

今年度前半の活動については、所報第3号に詳しく報告したので、ここでは主にその後の活動について報告することにする。前回の報告で触れた第5回研究会以降に開かれた研究会は以下のとおりである。

第6回 オーストラリア、アボリジニーのイメージ

(藤岡喜愛)

第7回 ギリシャ人は神話を信じたか

(大津真作) \*

第8回 日本中世説話における夢

(河合隼雄)

第9回 おとぎ話について

(デビッド・ライクロフト)

( ) 内は発表者、\*は非研究員

第6回研究会では、オーストラリア先住民族であるアボリジニーの生活と、岩絵などの絵画が、藤岡研究員の現地調査に基いて紹介された。報告の中で特に注目すべき点としてとり上げられたのは、彼らがしばしば用いる“dream”という概念の意味するところである。それは、睡眠時に見る dream を指すのみでなく、絵画に表現されたものや神話も dream であり、imagination, fantasy, image などと重なりながら、どれとも異った特殊な概念である。現在のところ、正確な意味内容は不明であるが、この“dream”について考えることは、人間の精神活動

究され、今日もなお続行されている。しかしそれらは社会経済史的側面や市民革命論に余りに偏っているとわれ、本研究会はこの反省の上に、18世紀ヨーロッパの社会と思想が長期的にみて、その後の工業化社会とどのように連結し、また断絶するのかをトータルな観点から解明しようとする特色をもつ。

上記の長期的トレンド観察、経済決定論を排するという研究方法は、歴史学、経済学、法学・政治学さらには社会学、人類学的アプローチとの協力を要求する。したがって本研究チームは、それぞれ個別の研究関心を持ちながら、それを越えて資料の共同入手やインターディシプリナリーな討論に従事している。

### ② 研究分団

前川貞次郎は、フランス啓蒙を中心としながら、ひろく18世紀全般の歴史思想・史学史的背景を研究している。

小笠原弘親は18世紀フランスの政治思想とくにJ・ルソーについての研究を続行し、本年4月以降半年間、ジュネーヴ大学文学部史学教室に留学し、原資料の収集と討論を行う予定であり、その成果が期待される。

黒田忠史は、18世紀ドイツのゲッチンゲン学派の歴史・法思想に集中し、広汎な原資料の入手と解説に精励し、すでに比較法制史学会でもその成果を世に問うている。

田中秀夫は、スコットランド啓蒙思想の研究を続行し、今後はよりひろく視野をひろげその社会的起源を探ろうとしている。

山口和男は、ドイツ歴史主義の起源をたづねて、J. メーザー研究にとりかかり、さし当ってオスナブリュック歴史協会年報のメーザー関係論文を探索し、当時のオスナブリュック市の原像に迫ろうとしている。

### ③ 61年度の計画

従来の研究会、連絡会を続行するとともに、国内外との研究連絡をとくに密にし、ジュネーヴ留学の小笠原に資料収集を委託する。また本年3月末より来日される西ドイツ・ハーゲン大学の U. Eisenhardt 教授を研究所に招き、18世紀神聖ローマ帝国の法制史について講演会・コロキウムを計画している。そして61年度以降には、各メンバーの研究が、何らかの形で研究成果として公表されるであろう。

を研究する上で極めて興味深いテーマであるとされた。

第7回には、研究員外から大津先生に発表をお願いした。ポール・ベヌの「ギリシャ人は神話を信じたか」と題する著作が紹介され、彼の歴史観について述べられた。この著作はベヌ自身が「世界を構成する想像力に関する試論」と呼ぶものである。各時代、各集団が特有の imagination を持ち、世界観を構成しているのであって、それらは共存しうるものであるとする。それぞれの時代が、共時的に存在する複数の世界観で構成され、完結していると考える歴史観が紹介された。また想像力による虚構と真理との間に決定的な区別はないとする捉え方には様々な意見が出され、活発な討論が行われた。

第8回には、学外からの参加者である河合研究員による発表がなされた。主に宇治拾遺物語における夢が取り扱われ、その中に見られる日本人の精神世界の特質が考察された。夢の中の出来事と現実が一致する物語について、ユングの言う共時的現象として捉え、日本に数多く存在する因縁話は、共時的性の物語と考えられることができるとされた。また、西欧のおとぎ話に比して、主人公の強い受動性が特徴として認められながら、ある時点で積極的な行動へ転換するパターンがあり、日本人の精神性を理解する上での一つのポイントであろうと述べられた。

第9回には、おとぎ話研究の諸問題について、い

くつかの物語や絵本の紹介を含みながら述べられた。絵本の絵画表現の中にテーマの象徴性（特にいわゆるフロイト的解釈によるもの）を強調したものが見られることや、テーマの中では、父親一息子関係に焦点が向けられ、その背景となっている西欧社会の家族関係についても触れられた。また、現代のサイエンスフィクションの中に、おとぎ話と類似のテーマが見られることから、「現代のおとぎ話」としてのサイエンスフィクションにおける象徴性を研究する方向が示された。

以上の定例研究会の他に、イメージを体験するための催しとして、「狂言における表現」「香道の会」「連歌の会」「花道の会」の四つの会が開かれた。「連歌の会」では寺島研究員の指導によって連歌を作り、連想の広がり、創造における集団の力などについて貴重な体験を得た。「花道」においては、表千家、裏千家の両作法を比較すると共に、闘茶（茶カブキ）を体験した。狂言と共に、身体象徴という点からも興味深い会であった。

以上が今年度行われた研究の報告である。それぞれの会において活発な議論が見られ、テーマは異りながら精神研究という点で共通の関心を発見することが多く、実りの多い会となっている。来年度は、さらに研究員の報告を続けながら、共通の関心を通して成果をまとめる方向を考えている。

(文責・森 茂起)

## 昭和61年度研究課題および研究チーム

### <研究所委員会企画のもの>

#### 平生鈺三郎の総合的研究

##### ●研究内容の概要

甲南学園の創設者である平生鈺三郎は、大正2年から昭和20年に至る日記及び求めに応じて行った各種の講演草稿、さらには自伝草稿などを残している。また書簡や育英団体である拾芳会の雑誌『拾芳』並びに各種のパンフレット、雑誌に掲載されたエッセーなども現存している。これらはいずれも日本近代史研究にとって極めて貴重な資料ではあるが、十分いかされることなく、筐底に秘されていた。そこで昭和59、60年度の総合研究所の研究の一環として、経済、経営、教育の側面からそれらの資料を使用して、平生の社会活動なり思想なりを探究した。この研究をうけて、それら平生の資料が豊富でしかも平生の社会活動が多面的であったが故に、さらに分担者も二名増やして、平生鈺三郎の総合的研究の一層の深化をはかりたい。

##### ●研究の特色

平生鈺三郎の日記、演説草稿、エッセーなど平生の一次資料及び、未だ明らかにされていないゞ夫人日記（大正3年～昭和35年）などの二次資料、さらには公刊済みの平生関係資料ならびに59、60年度の平生研究の成果などをふまえて、平生の教育・経済・経営・国守・政治などに対する見解や活動を、学問的に明らかにし、平生の日本近代史上における客観的位置付けを行うことをその特色としたい。

●総合研究として研究することの必要性

平生鈺三郎は、甲南学園の創立者・拾芳会という育英事業など教育者の側面、東京海上火災保険専務・川崎造船社長・日本製鉄会社社長など経営者的側面、貴族院議員・広田弘毅内閣の文部大臣・枢密顧問官など政治家的側面、日伯経済使節団長・北支駐在経済委員会委員長・鉄鋼連盟会長・大日本産業報国会会長など経済人的側面、そして大正日日新聞への干与・国字問題への言及などジャーナリスト的側面などをあわせもっている多面的活動人であった。それ故専門分野の異なる研究者による多角的研究が不可欠である。

●研究チームと研究の分担（○印は研究幹事）

三島康雄（営）関東大震災と平生の保険思想	高阪 薫（文）平生鈺三郎の教育思想
有村兼彬（文）平生鈺三郎の国字論	○安西敏三（法）平生鈺三郎の政治観
杉原四郎（名誉教授）平生鈺三郎の経済思想	柴 孝夫（京都産業大学）川崎造船所社長時代の平生鈺三郎

<公募によるもの>

ヴィクトリア朝文化の研究

●研究内容の概要

ヴィクトリア時代（1837～1901）は、人類史上初の工業化社会を生み出し、その発展と衰退を経験したばかりでなく、文化・思想の面でも輝かしい実績を残した時代である。

われわれとしても、日本の近代化を省み、特に戦後の高度成長がもたらした成果と、その未来を展望するときに、「拡張の時代」と称せられるヴィクトリア時代の興隆と衰退の過程に深い関心を向けざるを得ない。この時代の文化の諸相を対象として学際的な研究を試みようとするゆえんである。

研究員のうち松村は、文学作品に反映された都市像と家庭像を主題として社会史との関連研究をはかり、村岡は、社会と政治についての研究をさらに自然科学とスポーツの社会史に向けて進展させることをねらいとする。そして高橋と田中は、経済政策史および経済思想史を社会史、生活史の方向に広げ、中島はモダニズム文学研究者の立場から、経済学の転換期の思想的背景との関わりを通してブルームズベリ・グループの研究を進める。

以上のようにしてわれわれは、相互の学問的裨益をはかりつつ、ヴィクトリア朝文化の諸相についての総合的研究を志向するものである。

●研究の特色

- ① ヴィクトリア朝の文化に関する学際的総合研究は、日本においてはなされた例がなきに等しく、斬新な試みであること。
- ② イギリスのレスター大学のヴィクトリア研究所と密接な連携をとり、相互の交流と必要な資料蒐集の可能性があること。
- ③ ポスト・ヴィクトリア期への展望と、国際的な連関性をもつ研究であること。

●総合研究として研究することの必要性

ヴィクトリア時代の文化は特に層が厚く多様性に富んでいるだけに、学際的な総合研究なくしては、その全体像の把握は不可能だといってよい。幸いにして、文学から社会をみる研究者、政治史から社会史、科学史を志向する研究者、文学・美術に関心の深い経済政策史、経済政策思想史の研究者、経済学史を思想史のなかで考えようとする研究者が集まることができた。しかもいづれもヴィクトリア時代のそれぞれの専門分野において、著書または論文の実績をもっており、問題意識の共通基盤も有するので、総合研究の目標を定め、これを実行に移すのが容易である。

●研究チームと研究の分担（○印は研究幹事）

○松村昌家（文）ヴィクトリア朝小説に反映された社会像・時代像	村岡健次（文）ヴィクトリア朝の文化と自然科学・スポーツ
高橋哲雄（経）ヴィクトリア朝後期の経済政策思想——公有化思想の発生——	田中真晴（経）ヴィクトリア朝後期の経済思想——マーシャルと経済学雑誌——

中島俊郎 (文) ポスト・ヴィクトリア時代の文学的風土

視覚認識機構の共通性を探る 一昆虫から人まで一

●研究内容の概要

日頃、我々が目をとおして認識している外界を他の動物や昆虫はどのように受け止めているのであろうか？我々の心を和ませる木々の緑は昆虫の複眼にはどのように映るのであろうか？本研究は、生物が色合や明暗を認識する機構を行動遺伝学的手法や運動生理学的手法を併用して、明かにしようとする試みである。

1) 昆虫における明暗及び波長認識

(a) 光源の瞬間的な点滅刺激により跳び上がる突然変異系統 pyokori を用い、同行動 (pyokori 行動) を指標として白色総合光のもとで明暗変化の弁別閾値を求める。次いで、光源を単色光にかえ、各波長における pyokori 行動の誘発率を調べ、色調弁別閾値を決める。(b) 顕微分光機を用いて光受容細胞に含まれる視物質の光吸収特性を調べ、それらの特性から視覚弁別能を解析する。この目的のため、微弱光の分光測定が可能な測定機を開発、作成する。

2) 人における明暗及び波長認識

基本的には昆虫と同じ方法により、明暗及び波長の弁別閾値を決定する。昆虫では視覚弁別の指標として pyokori 行動を用いたが、人ではこれに代えて筋反射行動を指標とする。視覚により誘発される筋肉反射 (落下物体やシュウトされたボールに対して横に飛び退いたり、プレジャンプをして捕球する視覚反射行動など) は筋活動電位計などで電気信号としてとりだし、測定、記録することができる。このような生得的反射行動を指標とした測定は被験者の心理状態による誤差を最少限にすることができる。

以上の結果を総合して、昆虫と人との視覚弁別能の共通性を探る試みである。現在これらの測定方法を用いて、明暗刺激に対する弁別能の解析を進めつつあり、昆虫と人の明暗弁別閾値がほぼ等しいことを示唆する結果を得ている。

●研究の特色

視覚弁別能を解析する研究では、心理学的な実験法や電気生理学的な実験法がとりいれられてきた。前者では、被験者の条件づけなどによる反応行動を指標として刺激に対する応答を計測し、後者では、神経組織や神経細胞に電極を挿入し、刺激に対応する応答を電気信号として計測する。両法とも、被験者の心理状態による誤差や、電極挿入手術による影響がさけられない。

本研究の特色は、昆虫において遺伝学的に確立された視覚行動異常突然変異を用い、視覚弁別能解析モデルを作製し、このモデルにもとづいて、人における視覚弁別能を解析しようとする点にある。とくに、光刺激と筋反射を指標とした解析は、被験体の心理的影響をほぼ防ぐことができ、精度の高い測定結果を期待できる。

●総合研究として研究することの必要性

本研究は、生命体の高度に発達分化した感覚器、神経系、運動系の絶妙な連鎖反応を分析し、昆虫及び人の視覚認識の普遍性を明かにしようとする試みである。このためには、コンピューター制御による顕微分光測定機の開発及びそれを用いた視物質の分析、運動生理学的な解析、視覚行動の遺伝学的解析など、広範囲に亘り、各分野からの総合的な解析が不可欠である。

●研究チームと研究の分担 (○印は研究幹事)

加地早苗 (理・生) 形態異常突然変異種を用いた複眼組織構造の解析

上水流伸子 (体) 人における光刺激の弁別テスト

藤原儀直 (理・物) コンピューター制御による顕微分光機の作成及び視物質分析による評価

○道之前允直 (理・生) スペクトログラフによる単色光弁別閾値の決定

中嶋英治 (大阪府立大総合・生命) 行動異常突然変異種を用いた光刺激の弁別テスト

戦後日本の経済文化

●研究内容の概要

今日、国民の9割近くまでが、いわゆる「中流意識」をもっている。この現象をいかに把握するかは、時代の課題になっており、多様な大衆社会論が提起されている。それらの多くは未だ評論風止りであり、立ち入っ

た、しかも多面的な研究が今や要請されていると言える。本研究チームの小松、藤本、杉村は——来年度、「戦後日本の政治文化」のテーマで研究申請を予定している小島修一（経）、田中秀夫（経）、河田潤一（法）、丸田隆（法）、安西敏三（法）とともに——昭和56年以来、上記の問題意識に導かれて、月例研究会を続けてきたが、この三人に吉沢、鶴身を加えて、経済文化の側面から現代日本の大衆社会化現象を立ち入って分析しようと考えている。今少し具体的には、大量生産、大量消費、大衆文化に対して、日本人の生活スタイルの特色がどのように関連し、企業家はどうか対応し、教育制度はどのような役割を果たしているのか。更に、今日の大衆化現象を問題にしようとする場合、ローンのもつ意義はきわめて大きく、これはまた広く現代の貨幣制度そのものの問題である。

#### ●研究の特色

今や大衆社会論は百家争鳴の感があり、山崎正和、村上泰亮、西部邁、鶴見俊輔、吉本隆明等々、論者を数えたてればきりが無い程であるが、それらは、鋭い着眼点をもっている場合でも、大体において、時事評論的であると言える。本研究の特色は何よりもまず、評論的大衆社会論の域を越えて、社会科学的分析を試みようとする点にある。

#### ●総合研究として研究することの必要性

上記のような研究を行なおうとする場合、既成の分析枠にとらわれてはならず、したがってまた、単独で研究を進めるには自ずと限界があり、必然、多面的なアプローチが不可欠になってくる。

#### ●研究チームと研究の分担（○印は研究幹事）

小松陽一（営）企業文化考                      ○藤本建夫（経）教育文化考  
杉村芳美（経）生活文化考                      鶴身 潔（営）ローン文化考  
吉沢英成（経）民主主義と貨幣

## お知らせ

第4回総合研究所公開講演会

「学ぶ者の心」

京都工芸繊維大学長 福井謙一氏

5月10日(土)午後2時から5号館4階541号室

## ＜総合研究所人事異動＞

経済学部選出委員柳田侃教授、法学部選出委員藤田宏郎教授の任期満了に伴い、経済学部選出委員吉沢英成教授、法学部選出委員潮海一雄教授が、4月1日付で研究所委員に委嘱される。

## 編集後記

研究所報第4号をお届けします。研究所も開設3年目を迎え、ようやく活動も軌道に乗ってきた感があります。本号は、60年度共同研究の中間報告と、新年度の4本の共同研究の内容を詳しく紹介しました。本研究所が甲南大学でのすぐれた共同研究活動発展のためのファシリティとなっていることがわかりいただけだと思います。（Y）